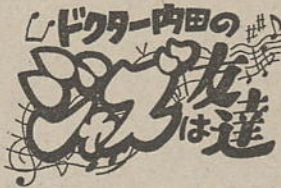


鳥取でライブ収録

「峰」板橋・井野一村上
という四人のジャズメンの、
鳥取でのライブを収録したC
D解説で、僕は「このバンド
を『フォーサウンズ』と命名
したい」と書いた。「なーん
だ。いま最高というバンドに
しては、どうってこともな

△④△



い、ふつうの名前だなあ」。
そんな感想が聞こえてくるよ
うだ。

正直言うと、メンバーでさ
え、最初は、あまりうれしそ
うでもなかったね。その上ま
ずいことに、アメリカには
「スリーサウンズ」なんてい
うのがあったからなあ。この
ピアノトリオ、結構売れたん

だが、大して立派な仕事残し
ていないからねえ。

ところで、ジャズの世界で
は「フォーサウンズ」のよう
な楽隊編成を、「ワンホーン
カルテット」と呼ぶ。この形
が一番、ポピュラーなのは、
手取り早くつくくりやすいか
らかもしれないが、それだけ
にイーシーにもなりやすい。
そつした中で、僕が終生忘
れられないと思うカルテット
がある。

一つは、六〇年代半ば、バ
ークレイ留学から帰って約半
年後に結成された「渡辺貞夫
—菊地雅章—鈴木勲—富樫雅
彦」という、いま思い出して
も身ぶるいするようなバンド
である。貞夫自身が「あの一
バンドが一番、スイングしてた
かなあ」なんて言うのを直
接、耳にしたことがある。

ピアノに菊地雅章

貞夫は、僕の最も敬愛する
友人でありミュージシャンだ
から、これからも、しばしば
登場するはずだが、ここで

た僕らのジャズ愛好クラブ
に、単身ゲストで出演した。
年明けて、グループをつく
ったと聞いて早速、一月下旬
に招いたのが、前田薫男(ピ
アノ) 原田政良(ベース) 富
樫雅彦(ドラム)をリズムとし

敬愛する渡辺貞夫
音楽に厳しく対処

しいお話を紹介しよう。
貞夫が帰国したのは、六五
年十一月。そして翌年には、僕
の求めに応じて、YIC(ナ
ゴヤ・ヤマハジャズ・クラ
ブ。ことし二十五周年を迎え

たカルテット。前田のピアノ
は意外かもしれないね。そし
て同じ年の十月、ピアノに菊
地雅章を定着させて、燃え
る貞夫を再び招くことにし
た。

当時、原田は、貞夫の最も
信頼するベーシストだったが
「気管支喘息(ぜんそく)」
という持病でツアーに耐えら

宝のテープが励み

前後、岡崎に着くや、すぐ

れず、その人選にとっても苦労
していたよだった。事実、
原田は七六年、わずか四十三
歳で急逝してしまつた。だから
この時には、大阪から上京し
て間もなかった池田芳夫を起
用して連れて来た。

半ばを過ぎて、別室に僕を
呼んだ貞夫は「ベース無理だ
なあ。辞めてもらうよ」。
「そんなむちゃな。せめてあ
すのコンサートまで待って
よ」

後に菊地や日野皓正のグル
ープに迎えられる、トップベ
ーシストに成長した池田は笑
つて言う。「あの時の貞夫さ
んの厳しさのおかげで、何と
か一人前になれたよつな気が
します」

この夜のテープは僕の宝だ
が、若く有望なジャズメンが
訪れるたびに聴かせて、貞夫
をはじめ、ニューヨークに移
つてしまった菊地、そして四
肢健全なころの富樫の真面を
知らない若者が、彼らの偉大
さをほじめて認識して、襟を
正す姿を見るにつけ、心から
記録しておいてよかったなあ
と思うのだ。

演奏する「フォーサウンズ」=鳥取市のライブハウスで

